

特別支援教育についての学びがある介護等体験の在り方に関する研究

—教諭及び支援を要する子をもつ保護者を対象とする調査から—

竹田 麻衣¹・和田 充紀²

The Research about the Way of the Experience of the Care for Learn about
Special Support Education
: Questionnaire Survey of Teachers and Parents of Children with Special
Support

Mai TAKEDA & Miki WADA

摘要

本研究では、小中学校の教員免許状取得を目指す学生が行う「特別支援学校での介護等体験」における必要な学びや求められる活動について、保護者や実際に学校現場で働く教諭を対象とした調査をもとに検討を行った。介護等体験の事前学習や事前に大学で学ぶ必要がある内容として、「障害に対する基礎知識」「支援の心構え」があげられ、介護等体験を通して身につけてほしいこととして「子供の良いところを見つける姿勢」があげられた。大学での学びの機会確保や事前指導やテキストとなるガイドブックの充実、また介護等体験当日の活動内容の検討と充実が求められる。

キーワード：特別支援教育、介護等体験、特別支援学校、事前指導

Keywords : special support education, the experience of the care, special support school, advance guidance

I. はじめに

介護等体験は、1997年に「介護等体験特例法（小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律）」が成立したことにより、小学校及び中学校の教諭の普通免許状を取得しようとする者に対して義務付けられた体験活動である（文部科学省,2011）。また、文部科学省の通達（1997）によると、介護等体験の制定趣旨は、「義務教育に従事する教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることの重要性にかんがみ、教員としての資質向上を図り、義務教育の一層の充実を期する」とされており、介護等体験が障害のある児童生徒の理解に役立つとともに、お互いを認め合い、尊重し、ともに生きるという理念を深めることにつながることが期待されている。

田中・片岡（2006a）は、琉球大学における介護等体験の現状について調査し、特殊教育諸学校（現在の特別支援学校）での体験は、これまでの障害児に対する偏見や差別的な先入観を変えるよいきっかけとなっていることを報告している。そして、2日間という短い期間ではあるが、授業のあり方や方法などを知り、障害のある児童生徒と触れ合い、障害に対する正しい理解をもつきっかけとなる大変重要な役割のある体験活動であると示した。また、田中・片岡（2006b）は、体験学生を対象と

した調査から、体験学生自身が介護等体験や事前指導に対する意識について調査し、介護等体験が学生にとって意味のある体験であることを明らかにする一方で、より充実させるための事前指導の在り方の検討が重要であることを指摘した。そして、田中・片岡（2007）は、特別支援学校及び社会福祉施設職員を対象とした調査において、体験学生の態度と知識や介護等体験に対する考えを明らかにすることで、介護等体験の意義について考えさせる機会を設けることの重要性を挙げ、事前事後指導の在り方について指摘した。

また、田実（2016）は、体験学生に対する事前事後調査において、特別支援学校における介護等体験について特別支援学校のもつ特殊性に鑑み、学生が特別支援学校の体験に求める内容のより正確な把握や吟味の必要性について言及した。

2006年に「学校教育法の一部を改正する法律」が公布され、2007年には学校教育法等の一部改正が施行された。これにより従来の特殊教育から特別支援教育へと転換され、障害のある全ての幼児児童生徒の教育の一層の充実を図るために、特別支援教育の推進が求められるようになった。2012年に文部科学省が行った調査の結果によると、「通常の学級に在籍する知的発達に遅れはないものの、学習面で著しい困難を示す」と担任が回答した児童生徒の割合は全体の6.5%（30人学級に1,2人）

¹⁾ 射水市立大門小学校 ²⁾ 富山大学人間発達科学部

であることが示された。このことから、現在地域の小・中学校の担任にも、特別なニーズがある児童生徒に対して、一人ひとりの実態に応じて、適切な指導と必要な支援を行うことが求められている。これは、介護等体験の法律に挙げられている「義務教育の一層の充実」の趣旨と一致していると考えられる。

富山大学を例にとると、小学校や中学校の教員免許状取得に際してカリキュラム上特別支援教育を学ぶ講義は現在のところは必須ではない。一方で、和田・中林(2016)によると特別支援学校で介護等体験を終えた学生の88.3%が介護等体験が特別支援教育の理解に役立ったと答えた。このことから、特別支援学校での介護等体験は特別支援教育の理解につながっており、介護等体験の充実が学生の特別支援教育の理解を深めると考えられる。

介護等体験特例法が成立してから今日まで介護等体験に関する調査研究や実践報告が数多くなされてきた。しかし、それらの研究は学生や受け入れ先である特別支援学校と社会福祉施設の職員を対象とした調査がほとんどである。そこで、本研究では介護等体験を受け入れている特別支援学校の保護者、特別支援を要し通常学校で学ぶ子供をもつ保護者、介護等体験を経験した学校現場の教員を対象として調査を実施することとした。介護等体験に対する思いや要望を把握し、保護者や教員のニーズを踏まえ、特別支援教育に関して必要であると考えられる大学での学びや事前指導の内容、および介護等体験に求められる具体的活動や内容について検討することを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 調査Ⅰ（介護等体験を受け入れているT大学附属特別支援学校の保護者を対象とした調査）

1.1 質問紙の作成

これまで、介護等体験を受け入れた特別支援学校に在籍する子をもつ保護者の介護等体験に対する思いについて調査をした先行研究はあまりみられない。これまでに、介護等体験の実践に関する研究として受け入れ学校及び福祉施設に対する調査についてまとめた先行研究としては田中・片岡(2007)がある。また、介護等体験の内容や事前事後指導の在り方についてまとめた先行研究としては、高畑ら(2000)と和田・中林(2015)がある。今回の保護者向けの質問紙を作成するにあたり、こうした先行研究を参考にしつつ、以下の三点に留意して、調査項目を選定した。

第一に、回答者の「子供の年齢」や「介護等体験についての理解」を取り上げた。

第二に、介護等体験の事前指導と活動内容「事前に学

んできてほしいこと」「体験中に学んでほしいこと」「活動内容の要望」を取り上げた。「事前に学んでほしいこと」「体験中に学んでほしいこと」については5段階評定で回答を求めた。「活動内容の要望」については、複数選択とした。

第三に、介護等体験に対する思い「必要性」「体験学生の受け入れに対する思い」「介護等体験についての意見」を取り上げた。「介護等体験についての意見」は自由記述とした。

1.2 調査内容及び項目の選定

以上の検討をふまえて、表1に示すような質問紙を作成した。調査項目は、「1.回答者の概要について」「2.教員を目指す学生と子供の関わりについて」「3.介護等体験に対する思いについて」の3大項目、14中項目で構成した。

1.3 調査の実施

(1) 調査対象

介護等体験を受け入れているT大学附属特別支援学校の保護者59名（以下、特別支援学校保護者とする）を対象とした。そのうち49名から回収を得た。回収率は83.0%であった。

(2) 調査時期・手続き

2017年5月中旬に質問紙をT大学附属特別支援学校に配布し、6月23日を回収期限として回収を依頼した。介護等体験の内容の充実を目的とする基礎資料を得るために活用する点、調査用紙は集計後に責任をもって破棄し、プライバシーに関することを固く厳守する点等についての説明を紙面上で行った。なお、配布及び回収はT大学附属特別支援学校にて介護等体験担当者と各学年の担任が行った。

2. 調査Ⅱ（T県内の通常学校に在籍する特別な支援を要する子をもつ保護者を対象とした調査）

2.1 質問紙の作成

今回の保護者向けの質問紙を作成するにあたり、調査Ⅰの質問紙と同様の視点で、調査項目を選定した。

2.2 調査内容及び項目の選定

表2に示すような質問紙を作成した。調査項目は、「1.回答者の概要について」「2.教員を目指す学生と子供の関わりについて」「3.介護等体験に対する思いについて」の3大項目、9中項目で構成した。

2.3 調査の実施

(1) 調査対象

T県内の通常学校に在籍する特別な支援を要する子をもつ保護者として「特別な支援を要する子をもつ保護者で構成する発達支援クラブに所属する保護者」20名（以下、通常学校保護者とする）を対象とした。そのうち15名から回答を得た。回収率は、75.0%であった。なお、すでに子供が中学校を卒業した保護者等からも回答を得

表1 特別支援学校の保護者を対象とする質問紙調査の項目と内容

調査項目	調査内容
1. 回答者の概要について	1.1 続柄 1.2 子供の年齢 1.3 介護等体験の認知
2. 学生と子供との関わりについて	2.1 学生受け入れに対する不安の有無 2.2 不安の内容 2.3 学生受け入れのメリットの有無 2.4 その理由 2.5 学生が事前に大学で学んできてほしいこと 2.6 学生が体験を通して学び身に付けてほしいこと 2.7 体験内容の要望
3. 介護等体験に対する思いについて	3.1 介護等体験の必要性 3.2 教員を目指す学生の受け入れについて 3.3 その理由 3.4 介護等体験についての意見

表2 通常学校の保護者を対象とする質問紙調査の項目と内容

調査項目	調査内容
1. 回答者の概要について	1.1 続柄 1.2 子供の年齢 1.3 子供の在籍学級 1.4 介護等体験の認知
2. 学生と子供との関わりについて	2.1 学生が事前に大学で学んできてほしいこと 2.2 学生が体験を通して学び身に付けてほしいこと 2.3 体験内容の要望
3. 介護等体験に対する思いについて	3.1 介護等体験の必要性 3.2 介護等体験についての意見

られた。今回は、全て含めて分析を行うこととした。

(2) 調査時期・手続き

T県内の通常学校に在籍する特別な支援を要する子をもつ保護者で構成する発達支援クラブの責任者に依頼した。活動日である2017年6月24日に配布し、7月10日を回収期限とした。介護等体験の内容の充実を目的とする基礎資料を得るために活用する点、調査用紙は集計後に責任をもって破棄し、プライバシーに関することを固く厳守する点等の説明をした上で記入を依頼した。その場で記入できる人はその日に回収し、記入できない人からは後日郵送にて回収した。

3. 調査Ⅲ（T県の6年次研修に参加した教員を対象とした調査）

3.1 質問紙の作成

現職の教員の介護等体験に対する思いについて調査をした先行研究はあまりみられない。調査Ⅰ・Ⅱの質問紙を参考にしつつ、以下の三点に留意して、調査項目を選定した。

第一に、回答者について「性別」「年齢」「勤務校・担

当」「所有免許状」「特別な支援を要する児童生徒の担当経験」を取り上げた。

第二に、介護等体験の事前指導と活動内容「事前に学んできてほしいこと」「体験中に学んでほしいこと」「活動内容の要望」を取り上げた。具体的には質問紙調査Ⅰと同様である。

第三に、介護等体験に対する思い「必要性」「介護等体験の学びの役立ち」「介護等体験についての意見」を取り上げた。「介護等体験についての意見」は自由記述とした。

3.2 調査内容及び項目の選定

以上の検討をふまえて、表3に示すような質問紙を作成した。調査項目は、「1.回答者の概要について」「2.介護等体験の取組について」「3.介護等体験に対する思いについて」の3大項目、11中項目で構成した。

3.3 調査の実施

(1) 調査対象

T県の6年次研修に参加した教員188名（以下、6年次教諭とする）を対象とした。そのうち、156名から回答を得た。回収率は、83.0%であった。

表3 6年次教諭を対象とする質問紙調査の項目と内容

調査項目	調査内容
1. 回答者の概要について	1.1 性別 1.2 年齢 1.3 勤務校・担当 1.4 所有免許状 1.5 特別な支援を要する児童生徒の担当経験
2. 介護等体験の取組について	2.1 学生が事前に大学で学んできてほしいこと 2.2 学生が体験を通して学び身に付けてほしいこと 2.3 体験内容の要望
3. 介護等体験に対する思いについて	3.1 介護等体験の必要性 3.2 介護等体験の学びの役立ち 3.3 介護等体験についての意見

(2) 調査時期・手続き

T県の6年次研修が行われた2017年11月14日に配布した。介護等体験の内容の充実を目的とする基礎資料を得るために活用する点、調査用紙は集計後に責任をもって破棄し、プライバシーに関することを固く厳守する点等についての説明を紙面上で行い、記入を依頼した。なお、配布・回収は事前に6年次研修担当者に依頼した。

Ⅲ. 結果

1. 調査Ⅰ（特別支援学校保護者を対象とした調査）について

1.1 回答者の概要について

特別支援学校保護者49名の内訳は、「母親」が46名(93.9%)、「父親」が3名(6.1%)であり、子供の在籍学部については、「小学部」が15名(30.6%)、「中学部」が15名(30.6%)、「高等部」が19名(38.8%)だった。教師を目指す学生が、2日間の介護等体験を行うことについて「知っている」が22名(44.9%)、「知らない」が27名(55.1%)であった。

1.2 教員を目指す学生と子供との関わりについて

(1) 学生が子供と関わることへの不安について

介護等体験で学生が子供と関わることについて、「不安はない」が49名中31名(63.3%)、「少し不安がある」が18名(36.7%)であった。不安の理由を複数回答で尋ねたところ、「学生の接し方」18名中9名(52.9%)、次いで、「学生の知識」8名(47.1%)、「学生のやる気」5名(29.4%)、「子供が緊張や不安になること」4名(23.5%)、「個人情報の漏えい」2名(11.8%)があげられた。

(2) 学生が子供と関わることのメリットについて

学生が、学校で子供と関わることについて4件法で尋ねたところ、「とてもよいと思う」が49名中34名(70.8%)、「少しよいと思う」が14名(29.2%)、「よいと思わない」が0名(0.0%)、「未記入」が1名(2.0%)であった。よい

と思う理由としては、「子供がいろいろな年代の方と関わりをもつことができる」、「子供が若い方と接することを学ぶ機会となる」、「いろいろな障害者がいることを学生に理解してもらえる」、「学生にもいろいろな子供がいることの認識を深めてもらったら、将来、子供も地域でもっと住みやすくなっていくのではと考えるから」などがあげられた。

(3) 介護等体験前に大学で学んできてほしいことについて

学生が介護等体験前に大学で学んできてほしいことについて、17項目をあげてそれぞれについて5件法で尋ねた。結果について「とても思う」と「やや思う」を合わせて集計をしたところ、最も多かった項目は、「障害についての基礎知識」の49名中48名(98.0%)であった。次いで、「児童生徒との関わり方」「児童生徒との支援の仕方」47名(95.9%)であった。「児童生徒を思いやる気持ち」「個への言葉掛け」が46名(93.9%)であった(表4)。

(4) 介護等体験を通して学び身に付けてほしいことについて

学生が介護等体験を通して学び身に付けてほしいことについて、19項目をあげてそれぞれについて5件法で尋ねた。結果について「とても思う」と「やや思う」を合わせて集計をしたところ、最も多かった項目は、「教師の児童生徒と向き合う姿勢」「児童生徒との関わり方」であり、49名中46名(93.9%)であった。次いで、「児童生徒の良いところを見つける姿勢」45名(91.8%)、「児童生徒を思いやる気持ち」が44名(89.8%)であった(表5)。

(5) 介護等体験に望む活動内容について

学生が介護等体験で行ったらよいと考える活動内容を複数回答で尋ねたところ、「レクリエーション活動への参加」と「授業での学習支援の補助」がともに49名中28名(58.3%)で一番多く、次に「児童生徒の話し相手」27名(56.3%)、「学級活動や学校行事等クラス指導の補助」22名(45.8%)、「移動の際の対応や補助」19名(39.6%)であった。児童生徒と関わる活動内容が高い結果となった。

1.3 介護等体験に対する思いについて

(1) 介護等体験の必要性について

教師を目指す学生にとって、特別支援学校での介護等体験の必要性があると思うかを尋ねた結果、「あると思う」が49名中48名(98.0%),「思わない」が1名(2.0%)であった。9割以上の保護者が、特別支援学校での介護等体験の必要性を感じている結果が得られた。

(2) 介護等体験の受け入れについて

介護等体験の受け入れについては、「快く受け入れることができる」が49名中27名(55.1%),「受け入れることができる」が22名(44.9%),「受け入れることができない」が0名(0.0%)であった。

(3) 介護等体験についての意見(自由記述)より

「介護等体験についての意見(自由記述)」は、20名からあげられた。「障害者をもつ親からすると、まずは、当校で、かかわりあって理解を深めて頂きたいと思います」、「大人であっても子供であっても一人ひとりそれぞれの支援の仕方は違うと思うので個々にあった支援・対応が必要であることを学んでほしいと思います」などの「障害の理解」に関する意見や、「介護等体験を行うことは、通常級の学習でも生かせることがあるのではと思います」「地域の学校の教師に一番障害児を理解してほしいです」などの「将来につなげてほしい思い」に関する意見があった。

2. 調査Ⅱ(通常学校保護者を対象とした調査)について

2.1 回答者の概要について

通常学校保護者15名の内訳は、「母親」が15名(100.0%)であり、子供の年齢は、「小学生」が6名(40.0%),「中学生」が6名(40.0%),「高校生」が2名(13.3%),「社会人」が1名(6.7%)であった。教師を目指す学生が、2日間の介護等体験を行うことについて「知っている」が3名(20.0%),「知らない」が12名(80.0%)であった。

2.2 介護等体験の取り組みについて

(1) 介護等体験前に大学で学んできてほしいことについて

学生が介護等体験前に大学で学んできてほしいことについて、17項目をあげてそれぞれについて5件法で尋ねた。結果について「とても思う」と「やや思う」を合わせて集計をしたところ、最も多かった項目は、「特別支援学校の概要」15名中15名(100.0%)であった。次いで、「介護等体験の意義・目的」「特別支援教育に関する制度」「特別支援学校の校内体制の整備」「児童生徒を思いやる気持ち」「児童生徒との関わり方」「児童生徒との支援の仕方」「個への言葉掛け」「全体への言葉掛け」であり、15名中14名(93.3%)あった(表4)。

(2) 介護等体験を通して学び身に付けてほしいことについて

学生が介護等体験を通して学び身に付けてほしいことについて、19項目をあげてそれぞれについて5件法で尋ねた。結果について「とても思う」と「やや思う」を合わせて集計をしたところ、最も多かった項目は、

表4 介護等体験前に学んできてほしいこと
「とても思う」・「やや思う」と回答した人数と割合

	調査Ⅰ (n=49)		調査Ⅱ (n=15)		調査Ⅲ (n=156)	
	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)
1. 介護等体験の意義・目的	45	91.8	14	93.3	140	89.7
2. 特別支援教育に関する制度	42	85.8	14	93.3	135	86.5
3. 特別支援学校の概要	43	87.8	15	100.0	140	89.7
4. 特別支援学校の校内体制の整備	35	71.4	14	93.3	113	72.4
5. 特別支援学校と外部の連携機関	38	77.6	13	86.7	112	71.8
6. 障害に対する基礎知識	48	98.0	13	86.7	152	97.4
7. 児童生徒一人ひとりの特性に対する理解	41	83.6	13	86.7	140	89.7
8. 学校での児童生徒の様子	36	73.4	13	86.7	128	82.1
9. 支援の心構え	45	91.8	14	93.3	142	91.0
10. 児童生徒を思いやる気持ち	46	93.9	14	93.3	137	87.8
11. 児童生徒との関わり方	47	95.9	14	93.3	140	89.7
12. 児童生徒への支援の仕方	47	95.9	14	93.3	137	88.5
13. 個への言葉掛け	46	93.9	14	93.3	125	80.1
14. 全体への言葉掛け	44	89.8	14	93.3	118	75.6
15. 児童生徒が過ごしやすい環境整備	42	85.8	13	86.7	123	78.8
16. 学生の服装・態度	27	55.1	13	86.7	117	75.0
17. 礼儀・作法(挨拶など)	39	79.5	13	86.7	124	79.5

「児童生徒の良いところを見つける姿勢」15名中15名(100.0%)であった。次いで、「児童生徒一人ひとりの特性に対する理解」「支援の心構え」「児童生徒を思いやる気持ち」「教師の児童生徒と向き合う姿勢」「児童生徒との関わり方」「支援の内容や方法」「児童生徒との支援の仕方」「個への言葉掛け」「全体への言葉掛け」「児童生徒が過ごしやすい環境整備」が14名(93.3%)であった(表5)。

(3) 介護等体験に望む活動内容について

学生が介護等体験で行ったらよいと考える活動内容を複数回答で尋ねたところ、「児童生徒の話し相手」が15名中10名(66.7%)で一番多く、次に「給食の指導や補助」が8名(53.3%),「着替えの指導や補助」が7名(46.7%),「校舎内活動の行事に関する指導の補助」と「校舎外活動の行事・大会等に関する指導の補助」がともに6名(40.0%)であった。児童生徒と関わる活動内容への要望が高かった。

2.3 介護等体験に対する思いについて

(1) 介護等体験の必要性について

教師を目指す学生にとって、特別支援学校での介護等体験の必要性があると思うかを尋ねた結果、「あると思う」が15名中15名(100.0%),「思わない」が0名(0.0%)であった。

(2) 介護等体験についての意見(自由記述)より

「介護等体験についての意見(自由記述)」は、11名か

らあげられた。具体的な内容は次のとおりであった。「どうしたらよいかは、まだわからなくてもいいので、とにかくいろんなことに気付いてもらいたい」、「障害があることがかわいそうとは思わないで、大変だけれども、特別なことではないことを理解してほしい」、「支援学校の子供たちと楽しかったり、嬉しかったりする経験をたくさんしてきてほしい」、「何に困っている子が、その子がわかる(できる)ように教員はどんな工夫や指導をしているか観察して下さい」、「通常学級の子供達が困っていることに気付いてもらえ、そこに対処して下さる環境を作ってほしいので、そのことを考えられる体験をしてほしいです」、「我慢している子(手をかんだり、鉛筆をかじったり)の様子も見てきてください。問題行動と思われる動きを我慢と見ると、何でつまづいているのかの気付きになるかもしれません」、「子供は(大人も)10人いれば10通りの個性があり、つまづく原因や困っていることも全て異なります」など、「特別な支援を要する子供への理解と対応」に関することがあげられた。

3. 調査Ⅲ(6年次教諭を対象とした調査)について

3.1 回答者の概要について

(1) 性別と年齢について

6年次教諭156名の内訳は、「女性」が77名(49.4%),「男性」が79名(50.6%)であった。年齢は「20代」が68名(43.6%),「30代」が72名(46.2%),「40代」が14名(9.0%),

表5 介護等体験を通して身に付けてほしいこと
「とても思う」・「やや思う」と回答した人数と割合

	調査Ⅰ (n=49)		調査Ⅱ (n=15)		調査Ⅲ (n=156)	
	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)
1. 介護等体験の意義・目的	41	83.7	12	80.0	119	76.3
2. 特別支援教育に関する制度	33	67.3	12	80.0	119	76.3
3. 特別支援学校の概要	30	61.2	13	86.7	130	83.3
4. 特別支援学校の校内体制の整備	30	61.2	13	86.7	116	74.4
5. 特別支援学校と外部の連携機関	33	67.3	13	86.7	126	80.8
6. 障害に対する基礎知識	43	87.8	13	86.7	147	94.2
7. 児童生徒一人ひとりの特性に対する理解	43	87.8	14	93.3	144	92.3
8. 支援の心構え	39	79.6	14	93.3	146	93.6
9. 児童生徒を思いやる気持ち	44	89.8	14	93.3	145	92.9
10. 教師の児童生徒と向き合う姿勢	46	93.9	14	93.3	140	89.7
11. 児童生徒の良いところを見つける姿勢	45	91.8	15	100.0	137	87.8
12. 児童生徒との関わり方	46	93.9	14	93.3	146	93.6
13. 支援の内容や方法	43	87.8	12	80.0	144	92.3
14. 児童生徒への支援の仕方	43	87.8	14	93.3	143	91.7
15. 個への言葉掛け	43	87.8	14	93.3	141	90.4
16. 全体への言葉掛け	39	79.6	14	93.3	135	86.5
17. 児童生徒が過ごしやすい環境整備	38	77.6	14	93.3	142	91.0
18. 学生の服装・態度	25	51.0	13	86.7	112	66.7
19. 礼儀・作法(挨拶など)	35	71.4	13	86.7	118	75.6

「50代」が2名(1.3%)であった。

(2) 勤務校について

勤務している学校種は、「小学校」が156名中53名(34.0%),「中学校」が44名(28.2%),「高等学校」が39名(25.0%),「特別支援学校」が18名(11.5%),「幼稚園」が2名(1.3%)であった。

(3) 所有免許状について

所有免許状は、「中学校教諭免許」が156名中117名(75.0%),「高等学校教諭免許」が112名(71.8%),「小学校教諭免許」が75名(48.1%),「特別支援学校教諭免許」が26名(16.7%),「幼稚園教諭免許」が21名(13.5%),「養護教諭免許」が3名(1.9%),「栄養士免許」が2名(1.3%),「栄養教諭免許」が1名(0.6%),「その他」が2名(1.3%)であった。

(4) 特別な支援を要する児童生徒の担当経験について

特別な支援を要する児童生徒の担当経験については、「経験がある」が156名中131名(84.0%),「経験がない」が25名(16.0%)であった。8割以上が、これまで特別な支援を要する児童生徒を担当した経験があった。

3.2 介護等体験の取り組みについて

(1) 介護等体験前に大学で学んできてほしいことについて

学生が介護等体験前に大学で学んできてほしいことについて、17項目をあげてそれぞれについて5件法で尋ねた。結果について「とても思う」と「やや思う」を合わせて集計をしたところ、最も多かった項目は、「障害に対する基礎知識」であり、156名中152名(97.4%)であった。次いで、「支援の心構え」142名(91.0%)あった。3番目は、「介護等体験の意義・目的」「児童生徒との関わり方」140名(89.7%)であった(表4)。

(2) 介護等体験を通して学び身に付けてほしいことについて

学生が介護等体験を通して学び身に付けてほしいことについて、19項目をあげてそれぞれについて5件法で尋ねた。結果について「とても思う」と「やや思う」を合わせて集計をしたところ、最も多かった項目は、「障害に対する基礎知識」であり、156名中147名(94.2%)であった。次いで、「支援の心構え」「児童生徒との関わり方」146名(93.6%),「児童生徒を思いやる気持ち」145名(92.9%)であった(表5)。

(3) 介護等体験に望む活動内容について

学生が介護等体験で行ったらよいと考える活動内容を複数回答で尋ねたところ、「児童生徒の話し相手」が156名中130名(83.3%)で一番多く、次に「校舎内活動の行事に関する指導の補助」が93名(59.6%),「授業での学習支援の補助」が80名(51.3%),「レクリエーション活動への参加」が74名(47.4%)であった。6年次研修に参加した教員は、介護等体験に参加する学生に対して児童生徒と関わる活動内容を望む割合が高かった。

3.3 介護等体験に対する思いについて

(1) 介護等体験の必要性について

教師を目指す学生にとって、特別支援学校での介護等体験の必要性があると思うかを尋ねた結果、「あると思う」が156名中143名(91.7%),「思わない」が13名(8.3%)であった。

(2) 介護等体験の学びの現在の仕事に役立っているかについて

特別支援学校での介護等体験を行った156名中113名に、特別支援学校での介護等体験の学びは現在の仕事に役立っているかを尋ねた結果、「役立っている」が113名中84名(74.3%),「役立っていない」が29名(25.7%)であった。

「現在の仕事に役立っている具体的内容(自由記述)」は77名からあげられた。内容をキーワードごとにカテゴリー分けしたところ、現在の仕事に役立っている介護等体験の学びは次の①から④の4つに分けられた。

1つ目は「児童と直接かかわる機会をもつことができるため、児童理解をする上で役立ったと思います」「児童生徒一人一人の個性について学べたこと」などの「①子供理解(障害理解)」。2つ目は、「障害をもつ子供への関わり方や学習指導、特別支援学校の体制(TT)など」「特別な支援を要する子供、そうでない子供も一人の子供と関わる時の心構えや一人一人の子供との関わり方等、通常学級にも通じるところがいろいろあると思う」「働く前に特別な支援を必要とする児童との関わり、子供の特性や関わり方など学べるのは良い機会だった」「個々のニーズに応じていこうとする姿勢が養えた」「特別支援学校の実際を初めて目のあたりにして指導への具体的なイメージがわいた」「学習面、環境面、どちらにおいてもバリアフリーになる試みの在り方を知ることができた」などの「②子供との関わり方や支援方法」。3つ目は、「自分の知らない世界を知ることができたのがよかった。特別支援学級の担任になったときにあまり不安を感じなかった」「教育の原点があると思います。このような教育現場がある事を知っておくことはとても大切だと感じました」「特支の教員を目指すきっかけとなりました」「世の中にはいろいろな人がいて助け合って生きているという事を感じ、それを子供に伝えるときに役立っている(自分の心の財産となっている)」「小学校においては地域の福祉センターや見守り隊の方等いろいろな方と関わる場がある。総合や道徳で子供に学習させるうえで教師自身知っておくといいものがある」などの「③自身の教育観」。4つ目は、「特別支援学校の役割や様子」「基礎的な知識や機関との連携等」などの「④特別支援教育の在り方と連携」であった。

(3) 介護等体験についての意見(自由記述)より

「介護等体験に望むこと(自由記述)」は、72名からあげられた。内容をキーワードごとにカテゴリー分けしたところ、「介護等体験に望むこと」は次の①から④の

4つに分けられた。1つ目は、「程度による支援の違い、区別して対応できる支援の在り方」「支援の仕方や声掛けの仕方（個人・全体）・特別支援教育の心構えについて」「子供たちの実態を見て、子供たち同士がどう関わっているのか教師が子供たちにどうかかわっているのかを学べたらよいと思う」「2日間で理解することは難しい。とにかく、生徒をよく見て、その対応をする教員をよく見る。そして、積極的に授業や活動の補助に入る」などの「①子供への関わり方や支援方法」。2つ目は、「通常学級における特別支援教育の在り方について学べたらよい」「現在の仕事でも教室には何人も支援を必要とする児童がいる。その児童との関わり方の基本的な姿勢を学生の時に学べたらと思う」「通常級での気になる子供への対応や、その時に困ったら相談する機関についての知識」。「通常学級における特別支援教育の在り方について学べたらよい」などの「②通常学級における特別支援教育の在り方と校内体制、相談機関などの知識・情報」。3つ目は、「生徒の特性についての理解」などの「③子供理解（障害理解）」。4つ目は、保護者との対応、連絡の在り方について「保護者への対応について学べたらよい」などの「④保護者への対応」であった。

4. 調査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲより

(1) 事前指導に求められることについて

学生が介護等体験前に大学で学んできてほしいことについての回答「とても思う」「やや思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「全く思わない」をそれぞれ5・4・3・2・1点として集計を行い、平均を求めた。特別支援学校保護者（調査Ⅰ）と通常学校保護者（調査Ⅱ）、6年次教諭（調査Ⅲ）の3者の結果を図1に示した。特別支援学校保護者が他と比較して高い傾向が見られた項目は、「障害に対する基礎知識」「児童生徒との関わり方」

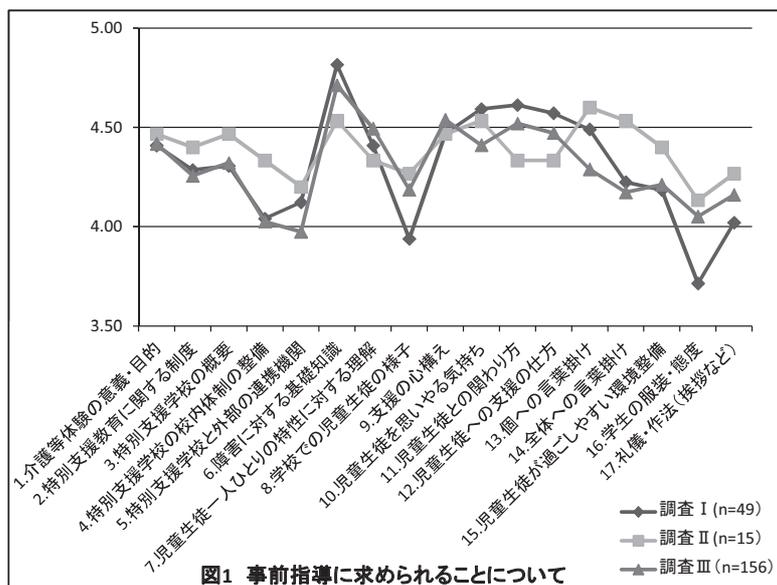
「児童生徒への支援の仕方」であった。通常学校保護者が他と比較して高い傾向が見られた項目は、「特別支援学校の校内体制の整備」「全体への言葉掛け」「児童生徒が過ごしやすい環境整備」であった。6年次教諭が他と比較して高い傾向が見られた項目は、「児童生徒一人ひとりの特性に対する理解」であった。3者ともに高い項目は、「障害に対する基礎知識」「支援の心構え」「児童生徒を思いやる気持ち」「介護等体験の意義・目的」であった。

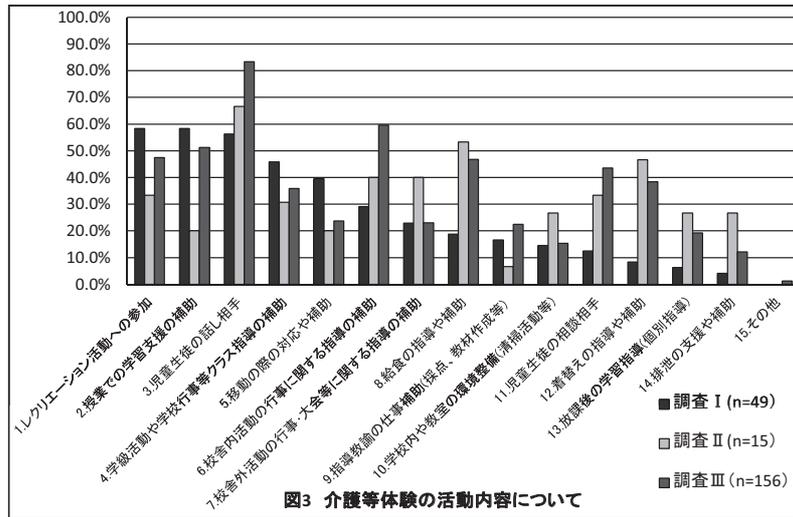
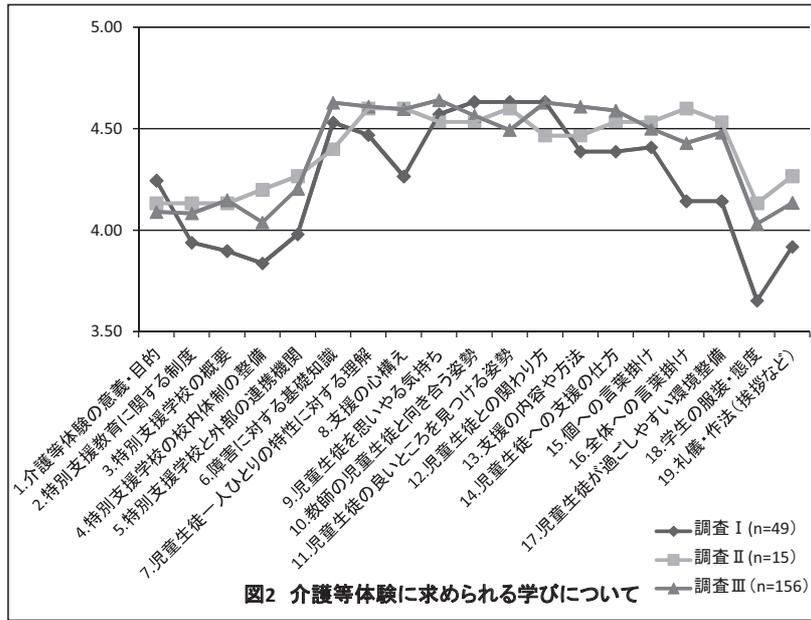
(2) 介護等体験に求められる学びについて

介護等体験に求められる学びについての回答「とても思う」「やや思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「全く思わない」をそれぞれ5・4・3・2・1点として集計を行い、平均を求めた。特別支援学校保護者（調査Ⅰ）と通常学校保護者（調査Ⅱ）、6年次教諭（調査Ⅲ）の3者に尋ねた結果を図2に示した。特別支援学校保護者が他と比較して高い傾向が見られた項目は、「介護等体験の意義・目的」「教師の児童生徒と向き合う姿勢」であった。通常学校保護者が他と比較して高い傾向が見られた項目は、「特別支援学校の校内体制の整備」「全体への言葉掛け」「礼儀・作法（挨拶など）」であった。6年次教諭が他と比較して高い傾向が見られた項目は、「障害に対する基礎知識」「支援の内容や方法」であった。3者ともに高い項目は、「児童生徒を思いやる気持ち」「教師の児童生徒と向き合う姿勢」「児童生徒の良いところを見つける姿勢」であった。

(3) 介護等体験に求められる活動内容について

介護等体験に求められる活動内容について特別支援学校保護者（調査Ⅰ）と通常学校保護者（調査Ⅱ）、6年次教諭（調査Ⅲ）の3者に尋ねた結果を図3に示した。3者ともに一番高かった項目は、「児童生徒の話し相手」「校舎内活動の行事に関する指導の補助」「給食の指導や





補助」「着替えの指導や補助」「レクリエーション活動の参加」であった。求められる活動内容として、3者ともに児童生徒と関わる活動内容をあげている結果が得られた。

Ⅳ. 考察

介護等体験の受け入れ校である特別支援学校の保護者は、学生が子供と関わることについては良いことと回答しており、通常学校保護者も必要であると回答している。また、6年次教諭の7割以上が介護等体験は現在の仕事に役立っていると回答しており、このことから、保護者と教諭ともに介護等体験の意義を感じていると考えられる。一方で、介護等体験について知らない保護者も多いことや学生が子供と関わることに不安を抱えている保護

者もいることから、介護等体験が保護者と学生の両者にとってよりよい体験となるような改善も望まれる。

1. 大学や介護等体験の事前指導に求められることについて

学生が介護等体験前に大学で学んできてほしいこととして最も高い項目は、「障害に対する基礎知識」であった。自由記述からは、『特別な支援を必要とする子供の理解』『地域の小・中学校に在籍する特別な支援を要する子供の理解』『通常学校における特別支援教育』について学んできてほしい」という内容が多数みられた。このような特別支援教育の基礎知識を得ることも、事前指導で望まれていると考えられる。現在、T大学の事前指導で使用されている介護等体験のガイドブックA(富山大学人間発達科学部附属特別支援学校, 2017)とガイドブックB(全国特別支援学校長会, 2010)には、特別支援学

校に在籍する児童生徒の障害が中心に記載されており、通常学校に在籍する児童生徒の障害に関する記載はほとんどない(表6)。したがって、発達障害に関する基礎知識について大学で事前に学ぶ機会を設定することや介護等体験の事前指導で充実することが望まれる。あるいは、介護等体験のガイドブックにわかりやすく記載する、記載内容を増やすなどの対応が必要と考える。

2. 介護等体験に求められる学びについて

学生が介護等体験を通して学び身につけてほしいこととして、最も多くあげられた項目は、「子供の良いところを見つける姿勢」であった。自由記述においても同様な記載が多くみられたため、より強く求められていることがわかる。このことについては、介護等体験の活動内容として、子供の良いところを見つけるための関わる機会を設けることが望まれる。また、良いところを見つけ、休み時間や給食の時間など伝えることができる時間

をしっかりと確保することが大切と考える。さらに、調査結果の割合は高くはないが自由記述において「特別支援学校と外部との連携機関」に関する知識を介護等体験中に学んでほしいという意見もあげられた。特別支援学校に行くことができる貴重な機会だからこそ、「特別支援学校の概要」や「特別支援学校と外部との連携機関」のことに学ぶ必要があると考えられる。特に通常学校保護者と6年次教諭からあげられた意見であることから、通常学校において必要と考えられる項目であることがうかがえる。加えて、通常学級における発達障害の子供の割合が増加している教育の現状に伴い、介護等体験を通して学ぶべき内容として望まれていると考えられる。このことについては、活動内容として取り入れるというよりは、特別支援学校で実際に見学や体験することや大学における学ぶ機会の設定、そして介護等体験のガイドブックへの記載などの対応も合わせて必要と考える。

表6 T県内で使用している介護等体験ガイドブックにおける記載の現状

項目	ガイドブック A		ガイドブック B	
	記載の有無	ページ数 (計 34 頁)	記載の有無	ページ数 (142 頁)
介護等体験の意義・目的について	◎	8	◎	7
特別支援教育に関する制度について	×	0	◎	34
特別支援学校の概要について	◎	5	◎	26
特別支援学校の校内体制の整備について	×	0	△	1
特別支援学校と外部の連携機関について	×	0	△	1
障害に対する基礎知識について	△※1	1	◎※2	13
児童生徒一人ひとりの特性に対する理解について	×	0	△	1
介護等体験を行う特別支援学校での児童生徒の様子について	◎	4	○	2
支援の心構えについて	○	2	◎	8
児童生徒を思いやる気持ちについて	△	0.5	△	1
特別支援学校の教師の子どもと向き合う姿勢について	×	0	△	0.5
特別支援学校教師の児童生徒の良いところを見つける姿勢について	△	0.5	△	1
児童生徒との関わり方について	○	3.5	◎	3
支援の内容や方法について	×	0	△	1
児童生徒との支援の仕方について	×	0	△	1
個への言葉掛けについて	×	0	△	1
全体への言葉掛けについて	×	0	△	1
児童生徒が過ごしやすい環境整備について	×	0	△	0.5
介護等体験時における学生の服装・態度について	△	0.5	△	1
介護等体験時における学生の態度について	○	2	△	1
その他(手続き・感想・資料)		7		37

※1：知的障害についての記載 1 ページ

※2：13 ページ中、視覚障害についての記載 2.5 ページ、聴覚障害についての記載 2.5 ページ
知的障害についての記載 2.5 ページ、肢体不自由についての記載 2.5 ページ
病弱についての記載 2.5 ページ、発達障害についての記載 0.5 ページ

記載有無の基準 ◎：3 ページ以上
○：1.5 ページ以上～3 ページ未満
△：0.5 ページ以上～1.5 ページ未満
×：0.5 ページ未満

3. 介護等体験に求められる活動内容について

介護等体験の活動内容として最も多くあげられた項目は、「児童生徒の話し相手」「校舎内活動の行事に関する指導の補助」「レクリエーション活動の参加」であった。自由記述には学生が児童生徒と関わることのメリットについての記載も多かった。具体的には、児童生徒がいろいろな人と関わりをもったり、人に興味を持ち、質問や会話をしたりといった「コミュニケーション能力の増加」や大学生が入ることによって遊び・体を動かすことなど、一緒にじっくりと関わってもらえるといった「活動の幅の広がり」が考えられる。このことから、介護等体験の活動内容として授業や様子の観察だけではなく、直接関わることができる活動を多く取り入れることは、大学生にとっても児童生徒にとってもよい機会になると考えられる。

今後は、今回の結果から得られた内容と現在の教育現場の実態や求められていることなどを踏まえて、大学における特別支援教育の充実と、特別支援教育の学びがある介護等体験をあわせて実施していくことが必要である。特別支援学校での介護等体験が特別支援教育の学びの場の1つとなり、支援を要する児童生徒とその保護者、教員を目指す学生の両者にとってよりよい体験となることが望まれる。

謝辞

本研究において、回答にご協力いただきましたT大学附属特別支援学校およびT県内の発達支援クラブに所属する保護者の皆様、T県の6年次研修に参加された教員の皆様に心より感謝致します。

引用・参考文献

文部科学省(1997):平成9年介護等体験特例法の概要(小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律). [http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1314079.htm)

[attach/1314079.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf)

文部科学省(2012):通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について.

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf

田中敦士・片岡淳(2006a):介護等体験の実践に関する研究(第1報)ー琉球大学における実践の現状ー. 琉球大学教育学部紀要, 69, 1-8.

田中敦士・片岡淳(2006b):介護等体験の実践に関する研究(第2報)ー体験学生に対する質問紙調査からー. 琉球大学教育学部紀要, 69, 9-19.

田中敦士・片岡淳(2007):介護等体験の実践に関する研究(第3報)ー受け入れ学校および福祉施設に対する質問紙調査ー. 琉球大学教育学部紀要, 70, 69-82.

田実潔(2016):特別支援学校における介護等体験での学生意識変化ー11年間のデータからー. 北星学園大学社会福祉学部北星論集第53号, 37-42.

富山大学人間発達支援学校(2017):介護等体験ガイドブック.

梅澤嘉一郎(2008):介護等体験における自己達成感に関する研究ー社会福祉施設の体験からー. 川村学園女子大学研究紀要, 19-1, 129-147.

和田充紀・中林由利子(2015):特別支援学校における介護等体験の内容と事前指導の在り方ー体験学生および特別支援学校教師の意識調査の結果からー. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 教育実践研究, 10, 123-130.

山下松蔵(2003):教員養成における介護等体験の意義と効果ー社会福祉施設の介護等体験を中心にー. 國學院短期大学, 20, A109-A141.

全国特別支援学校長会(2010):特別支援学校における介護等体験ガイドブック フィリア. ジアース教育新社.

(2018年8月31日受付)

(2018年10月3日受理)